【銀河鉄道の夜（仮）】

1. 現実

電車の走行音

電車の止まる音

ジョバンニ　どうして僕はこんなにかなしいのだろう。僕はもっとまっすぐで立派な人間でなければいけない。空のずうっと向うに小さな青い火が見える。あそこはしずかでつめたい。

ジョバンニの頭上に星が灯る

電車の走行音

ザネリ、ジョバンニを冷やかす

ジョバンニ　ザネリ、烏瓜ながしに行くの。綺麗な星だもんね。お祭りに行くのかい。

ザネリ　犯罪者の子どもだな！　親父さんは帰ってきたか？　今度は何を密漁してきたんだ？　そら、らっこの上着がくるんだろ。らっこの上着が来るよ。ははははは。

ジョバンニ　何だよ。ザネリ。お父さんならまだ帰ってこないよ。でもきっと帰っ

てくるんだ。

ザネリ　らっこの上着。らっこの上着が来るよ。はははは。

ジョバンニ涙を拭いて、空を見上げる。

ジョバンニ　お母さん（おっかさん）、今帰ったよ。具合はどう？　そう、薬が効いたんだねぇ

ジョバンニ、母の近くの窓を開ける。

ジョバンニ　お母さん、角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れようとおもって。姉さんは帰ったの。ああ、この辺が綺麗になってるねえ。このトマトは姉さんが持ってきたのかな。おいしそうだねえ。お母さん、牛乳は……

ジョバンニ　お母さん、牛乳は来てないかい

ジョバンニ　そう、じゃあ僕が取ってくるよ。

母　お父さん（おとさん）は漁へ出ていないかもしれない

ジョバンニ　ぼく、お父さんはきっと間もなく帰ってくると思うよ

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ジョバンニ　今朝の新聞に、今年は漁が大へんよかったって書いてあったよ。だからきっと間もなく帰ってくるよ

ジョバンニ　もう、窓を閉めておこうか。お母さん。お父さんはきっと、きっと漁に出ているよ。お父さんが監獄に入るようなそんな悪いことをしたはずがないんだから。

ザネリ　らっこの上着。らっこの上着が来るよ。ははははは

ジョバンニ　この前、お父さんが持ってきて学校へ寄贈した大きな蟹の甲らだのトナカイの角だの、今だってみんな標本室にあるんだ。授業のとき先生がかわるがわる教室へ持って行くよ。

ザネリ　らっこの上着。らっこの上着が来るよ。ははははは。

ジョバンニ　みんな、僕に会うとそれを言うよ。冷やかすように言うんだ。

ジョバンニ　うん。みんな僕に、悪口を言うんだ。

ジョバンニ　お母さん、ぼく、牛乳を取ってくるよ。

ジョバンニ　うん。そうだねぇ、お祭りも見てくるから、きっと一時間半で帰ってくるよ。

電車の走行音

2. 銀河鉄道（白鳥の停車場）

ナレーション　銀河ステーション、銀河ステーション

ジョバンニの頭上の星が明るくなる

カムパネルラ　冬と銀河ステーション

ジョバンニ　ソラには塵のやうに小鳥が飛び　カゲロウや青いギリシヤ文字は

せわしく野はらの雪に燃えます

パッセン大街道のヒノキからは　凍った雫が燦々と降り

銀河ステーションの遠方シグナルも　今朝は真っ赤に澱んでいます

川はどんどんザエを流しているのに　皆は生ゴムの長靴をはき

狐や犬の毛皮を着て　陶器の露店をひやかしたり

ぶらさがった章魚を品定めしたりする

あのにぎやかな土沢の冬の市日です

カムパネルラ　はんの木とまばゆい雲のアルコホル

あすこにやどりぎの黄金のゴールが

さめざめとして光ってもいい

ジョバンニ　あぁ　Josef Pasternack（ジョセフ・パスターナック）の指揮する

この冬の銀河軽便鉄道は　幾重のあえかなザエをくぐり

カムパネルラ　電信柱の赤いガイシと松の森

ジョバンニ　にせものの金のメタルをぶらさげて　茶色の瞳をりんと張り
つめたく青らむ天椀の下　うららかな雪の台地を急ぐもの

カムパネルラ　窓のガラスのザエのシダは　だんだん白い湯気に変わる

ジョバンニ　パッセン大街道のヒノキから　雫は燃えて一面に降り
はねあがる青い枝や　紅玉やトパース　またいろいろのスペクトルや
もうまるで市場のような盛んな取引です

ジョバンニ、列車の席に座っている。外は星空。見慣れない光景。

ジョバンニ、前の席のカムパネルラに気が付く。声をかけようとして

カムパネルラ　みんなは随分走ったけれども乗れなかったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。

カムパネルラ、ジョバンニの隣に座る

ジョバンニ　何処かで皆を待っていたほうがいいかな

カムパネルラ　ザネリはもう帰ったよ。お父さん（おとうさん）が迎えに来たんだ。

ジョバンニ　お父さん（おとさん）。

カムパネルラ　ああ！　しまったな。ぼく、水筒を忘れてきちゃった。スケッチブッ

クも置いてきちゃったな。

ジョバンニ　あはは。なんだか僕も、何か忘れてきた気がするよ。

カムパネルラ　ほんとう？　でも構わないよ。もうすぐ白鳥の停車場なんだ。ぼく、白鳥を見るのが好き。天の川の向こうに飛んでいたって、きっと見えるよ。

カムパネルラ、黒曜石の地図（星座早見表）を開く

ジョバンニ　この地図、どこで買ったの？　黒曜石で出来てるねぇ

カムパネルラ　銀河ステーションで貰ったんだよ。もらわなかったの。

ジョバンニ　（地図を見ながら）ねえ、銀河ステーションはどこだろう。今僕たちはどこにいるんだろう。

星明かりが強くなる

ジョバンニ　ぼくら、今は天の原にいるんだ。あの河原は月夜かなぁ

カムパネルラ　月夜じゃないよ。銀河だから光るんだよ。

ジョバンニ　この汽車、石炭を焚いてないね。

カムパネルラ　アルコールか電気で走らせているんだね。

ジョバンニ　りんどうの花が咲いているよ。すっかり秋だね。窓から飛び降りてさっと一輪取ってこようか。

カムパネルラ　ダメだよ。ほら、もうあんなに遠くに行っちゃったよ。

電車の走行音

ナレーション　まもなく白鳥の停車場、白鳥の停車場

ジョバンニ　白鳥、楽しみだねぇ

カムパネルラ　十一時きっかりには着くんだよ

時計の音

ジョバンニ　ぼくらも降りてみようか

カムパネルラ　そうだね。降りてみよう。

電車の停車音

ジョバンニ、カムパネルラ、席から立ち上がり電車を降りる。

カムパネルラ　南から　また東から　ぬるんだ風が吹いてきて

くるほしく春をはらんだ黒雲が　いくつもの野ばらの藪を渉って行く

ジョバンニ　ひばりと川と　台地の上には　いっぱいに種苗を積んだ汽車の音

カムパネルラ　この砂、水晶だ、中で小さな火が燃えているよ

ジョバンニ　ねえ、あっちへ行ってみようよ。

カムパネルラ　ああ、変なものがあるよ

ジョバンニ　くるみの実だよ。沢山ある。流れてきたんじゃない。岩の中に入ってるんだ。

カムパネルラ　大きいね。このくるみも普通の倍はある。しかも少しも傷んでない。ああ、みて、あそこに誰かいるよ！

ジョバンニ　何かを彫っているみたいだねぇ。大学士の人かな。きっとくるみを掘っているんだよ。僕たちも手伝おうか（大きく手を振る）ああ、手伝ってもいいってさ。

カムパネルラ　これはざっと百二十万年前くらいのくるみだね。そこの突起を壊さないようにしなくっちゃ。もっと遠くから掘ろうよ。乱暴はしないようにね。

ジョバンニ　これは標本にするのかな

カムパネルラ　どうだろう。百二十万年前、第三世紀の後のころ、ここは海岸だったんだって。ほら、くるみの下から貝殻も出てきた。きっと今、川が流

れているところに塩水が寄せたり引いたりしていたんだね。

ジョバンニ　そんなことを調べて何をするんだろう。

カムパネルラ　うーん、証明するのに要るのかもしれないね。

ジョバンニ　証明？

カムパネルラ　ぼくらが見ている綺麗なこの野原が、他の人にとっても綺麗かどうか、他の人も同じ景色を見ているか、それを証明するのに要るんだよ

ジョバンニ　そうか、きっとそうだね！　ぼくはここが好きだよ

カムパネルラ　ぼくもここが好き。同じだね。

ジョバンニ　うん！　ね、あっちももっと掘ってみようよ

カムパネルラ、ジョバンニ、くるみを拾う

ジョバンニ　わぁ！　肋骨が出てきたぞ！

列車の汽笛音

カムパネルラ　もう時間だ。

ジョバンニ　集めたくるみ、ここに置いていこう。大学士の人に伝えなくちゃ（大きく手を振る）

カムパネルラ、ジョバンニ、列車の席に座る

ジョバンニ　みて、カムパネルラ。あの人はまだくるみを取っているよ

カムパネルラ　本当だねぇ

星明かりが消えるまで大学士に手を振る。

電車の走行音、

3．記憶の中（活版所）

カムパネルラ　あっちもこっちも　ひとさわぎおこして

いっぱい呑みたいやつらばかりだ

羊歯（しだ）の葉と雲

世界はそんなにつめたく暗い

けれどもまもなく　さういふやつらは

ひとりで腐って　ひとりで雨に流される

あとはしんとした青い羊歯（しだ）ばかり

そしてそれが人間の石炭紀（せきたんき）であったと

どこかの透明な地質学者が記録するであらう

カムパネルラ、退場

ジョバンニの頭上の星明かりが暗くなる。

ザネリ　らっこの上着がくるぞ

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ザネリ　らっこの上着、上着がくるぞ、はっははは

母　お父さんは帰ってこないかもしれない

電車の走行音が大きくなる。汽笛の音。犬の鳴き声。工場の騒音。

音が止む。ジョバンニ、虫めがねを使いながら文選工の仕事をしている。

文選工たちの笑い声が響く

文選工　よお、虫めがね君。たいへんだねえ、がくせいさんは。俺達なんざより利口で良いようだあね。がんばりたまえよお。

ジョバンニ、涙をぬぐいながら文字を拾う

文選工　ところで父ちゃんは帰ってきたのかい。らっこの上着は、来たのかい。なぁ、虫めがね君。

文選工たちは笑う。時計の鐘が鳴る。

ジョバンニは椅子から立ち上がり仕事を終える。

銀貨を貰い、ジョバンニ退場する。パンと角砂糖を買って出てくる。

ジョバンニひとりでに転ぶ。ジョバンニ、パンを落とす。

文選工、の笑い声。

ジョバンニ、空を見上げる。パンの砂を払う。退場する。

ザネリ　らっこの上着がくるぞ

母　お父さんは漁へ出ていないかもしれない

ザネリ　らっこの上着、上着がくるぞ、はっははは

母　お父さんは帰ってこないかもしれない

文選工　父ちゃんは帰ってきたのかい。らっこの上着は、来たのかい。なぁ、虫めがね君。

電車の走行音が大きくなる。汽笛の音。犬の鳴き声。工場の騒音。

列車の汽笛が鳴る。

カムパネルラ、戻ってくる。

カムパネルラ　雨にも負けず　風にも負けず

雪にも夏の暑さにも負けぬ

丈夫な体を持ち　慾は無く
決して怒らず　いつも静かに笑っている
一日に玄米四合と　味噌と少しの野菜を食べ

ジョバンニ　あらゆることを　自分を勘定に入れずに
よく見聞きし分かり　そして忘れず

カムパネルラ　野原の松の林の影の　小さな萱(かや)ぶきの小屋にいて
東に病気の子ども有れば　行って看病してやり
西に疲れた母あれば　行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば　行って怖がらなくてもいいと言い

ジョバンニ　北に喧嘩や訴訟があれば　つまらないから辞めろと言い

カムパネルラ　日照りの時は涙を流し　寒さの夏はオロオロ歩き
皆にでくの坊と呼ばれ　褒められもせず

ジョバンニ　苦にもされず

カム&ジョ　そういうものに私はなりたい

4. 銀河鉄道（鳥を捕る人）

赤ひげ、登場。

赤ひげ　失礼、ここへかけても？

ジョバンニ　ええ、どうぞ。

赤ひげ　ああ、有難い。大荷物でね。ちょいと失礼しますよ。

赤ひげ、荷物を網棚にのせ、ジョバンニとカムパネルラに向かい合って座る

赤ひげ　あなた方はどちらへいらっしゃるんです？

ジョバンニ　どこまでもいくんです。

赤ひげ　そいつはいい。この汽車はじっさい、どこまででも行きますぜ

カムパネルラ　あなたはどこへ行くんです

赤ひげ　わしはすぐそこで降ります。鳥を捕まえに行くんです。

カムパネルラ　何鳥ですか

赤ひげ　ツルやガン、サギや白鳥です

ジョバンニ　ツルは沢山いますか

赤ひげ　いますとも、いますとも。さっきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。今でも聞こえるじゃありませんか。そら、耳を澄まして聞いてごらんなさい。

水の音が流れる

ジョバンニ　どうして鳥を捕るんですか。標本ですか。

赤ひげ　標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。

カムパネルラ　おかしいねえ。ツルやサギをですか。どうやって。

赤ひげ　そいつはな、雑作ない。サギというものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼおっとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこういう風にして下りてくるとこを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたっと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまって安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切ってまさあ。押し葉にするだけです。おかしいも不審もありませんや。そら。さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです（赤ひげ網棚から荷物を取り、鳥を見せる）

カムパネルラ　目を瞑ってるね

ジョバンニ　美味しいんですか

赤ひげ　毎日注文があります。こっちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。

ジョバンニ、カムパネルラ、鳥を食べる。チョコレートっぽい。

赤ひげ　今年の渡り鳥は景気がいい。素敵なもんだ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、あっちからもこっちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こっちがやるんじゃなくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまって、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしぁ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのとこへ持って来たって仕方がねえや、大将へやれって、こう云ってやりましたがね、はっは。

カムパネルラ　こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。

赤ひげ　はっはっは。（鳥をしまい始める）いやはや、こんな仕事話。染みついた習慣はなかなか体から離れませんなぁ。もう、ここでは、こんなもんは、ほんとうは必要ないというんに。どうも、身の丈に合うくらいの生活がいい。ほんとうのさいわいに気付かないくらいの生活が、ほんとうのさいわいだったもんです。ところで、あなたがたはどちらからおいでなんですか

ジョバンニ、カムパネルラ、黙る

赤ひげ　ああ、遠くからですね（大きくうなずく）

列車の汽笛が鳴る

赤ひげ　もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。あれは、水の速さをはかる器械です。あそこを水が溜まって、サファイアたトパースが星を送り出すのです。水も

車掌　切符を拝見いたします。

カムパネルラと赤ひげ、切符を出す。

車掌、切符に切り込みを入れる。

車掌　あなたのは？

ジョバンニ、服のポケットを探る。上着に緑色のハガキが入っている。

やっちまえと思いながら差し出す。車掌は驚いた顔をする。

車掌　これは三次空間の方からお持ちになったのですか。

ジョバンニ　何だかわかりません

車掌　はっはっは。これはこれは珍しい。よろしゅうございます。もうじきワシの停車場。サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時ころになります。よい旅を。

車掌が切符を返却する。赤ひげとカムパネルラは覗き込む

赤ひげ　おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へ

さえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手に歩ける通行券です。こいつをお持ちになれぁ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた大したもんですね

ジョバンニとカムパネルラ、赤ひげを無視して窓の外を見る

赤ひげ、退場

カムパネルラ　次はワシの停車場だったね（地図を見ながら）

ジョバンニ、赤ひげを探し出す

カムパネルラ　あの人、何処へ行ったんだろう

ジョバンニ　ほんとう。どこへ行ったのかな。どこかでまた会うのかな。僕、あの人とうまく話せなかった。

カムパネルラ　なんだか悪いことをした気がする。

ジョバンニ　なんだか心地が悪いや。カムパネルラ、あの人、荷物をぜんぶ置いていったよ。

カムパネルラ　きっともう、必要なくなったんだね

カムパネルラ、床に一枚の銀貨を見つける。ジョバンニに手渡す。

カムパネルラ　ねぇ、何か落ちているよ。きみの物じゃないかい。

ジョバンニ　ああ、銀貨だ。けれど僕の物かわからないよ。

カムパネルラ　これもあの人の物かな、僕には必要のないものだから。また今度車掌さんが来たときに預けようか。

ジョバンニ　そうだね、そうしよう（ポケットの中に仕舞う）

星明かりが暗くなる

5．記憶の中（学校）

カムパネルラ　いまは燃えつきた瞳も痛み　眼路も綾だち酸える

ともだちよ　世界はみんな

青いいろした脂肪ではないだらうか

カムパネルラ、前の先に座る

先生　ではみなさんは、このぼんやりと白いものがほんとうは何かわかりますか

カムパネルラ、手を上げる。ジョバンニ、手を挙げるが、すぐに下ろす

先生　ジョバンニさん。

ジョバンニ、勢いよく立ち上がる

先生　大きな望遠鏡で銀河をよく調べるとあの白い部分はなんでしょう

ジョバンニ、答えない（もじもじしている）

クラスの笑い声

先生　（咳払い）ではカムパネルラさん

カムパネルラ、立ち上がるが、答えない。

先生　……この白い銀河を望遠鏡で見ますと、たくさんの小さな星が集まっているとわかるのです。ジョバンニさんそうでしょう。

ジョバンニ、頷く。頷いたまま下を見る。

先生　ですから天の川という名前は集まった星〻を川底の砂粒に例えている言葉なのです。外の国では天の川をミルキーウェイなんて言ったりして、聖母マリヤの乳に例えるのです。天の川の水は光を伝える真空というものです。真空の中に地球や太陽や、月や、数々の星々が浮かんでいるのです。私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えて白くぼんやり見えるのです。星には太陽なんかのように自

分自身で光っているものがあります。自分で光っていない星は、光っている星の光を受けて輝きます。そうして星が集まって白く見えるというわけなのです

ジョバンニ　そうだ僕は知っていたんだ。勿論カムパネルラも知っていた。それはいつかカムパネルラのうちで、カムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあった。カムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎からおおきな本をもってきて、銀河のページをひろげた。真っ黒に塗りつぶされたページいっぱいに白い点々のある美しい写真だった。そうだ。僕はあれが星の集まりだと知っていた。だけどもどうして、僕にはそれが、わかるようで、わからない気がしたんだ。

ジョバンニ、カムパネルラ、着席する

先生　ああ、もう終わりの時間ですね。この続きはまた次回。今日は銀河のお祭、ケンタウル祭ですね。みなさん、そらを見た時は今日の話を思い出してください。ではここまでです。礼。

クラスの笑い声が大きくなり、足音と共に教室から出ていく

ジョバンニはクラスメイトを羨ましそうに見ている。

6．銀河鉄道（ほんとうのさいわい）

ジョバンニ　なんだかリンゴの匂いがする。お腹が減ってきたからかなぁ。

カムパネルラ　ほんとうにリンゴの匂いだよ。野ばらの匂いもするね。

女の子　あら、ここはどこでしょう。まあきれいだわ！

青年　僕たちは空へ来たんだ。私達は天へ行くのですよ。御覧なさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです。

女の子が青年をジョバンニとカムパネルラの前の席に座らせる。

女の子　私はお母さまのとこへ行くのね。

青年　きっとお母さまも楽しみにお待ちのはずです。きっと今頃Ora Orade Shitori egumo（おらおらで一人いぐも）なんて歌ってね。貴方が寒くないかとお腹を空かしていないかと心配してらっしゃることでしょう。

女の子　ええ、そうね。お母さまはきっと待っていらっしゃるわ。ああ、でも私、船に乗らなければよかったかしら。今度はお父様に寂しい思いをさせてしまう。

青年　ええ、お父さまはまだいろいろお仕事があるのですから、けれどももうすぐあとからいらっしゃいますよ。ごらんなさい。あの立派な川はこの前お話ししましたでしょう。ツインクル、ツインクル、リトル、スター。お母さまが貴女と眠るときに歌っていた、あの窓から見える川ですよ。ああ、私達はもうなんにも悲しいことないのです。私達はこんなに美しい銀河を旅して、神さまのところへ行きます。

ジョバンニ　（小声で）ねぇ、カムパネルラ。あの人たちなんだか濡れているね。

カムパネルラ　ああ、ほんとうだね。あなた方はどちらからいらっしゃったのですか。よろしければ、ここは暖が当たりますから、どうぞおかけください。

青年　ああ、有難い。お優しいですね。ぜひ甘えさせていただきましょう。さあ、どうぞよく暖まってください。

カムパネルラ　濡れていますね。車掌さんに何か拭く物を頼みましょうか

青年　いいえ、きっともうじき降りますから。ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

女の子　私、溺れたの。気がついたらここにいたのよ。

青年　……ああ、そうなんです。実は乗っていた船が氷山にぶつかりまして沈んでしまったようなのです。どうにか彼女だけは助けたかったのですが。

ジョバンニ　どうかしましたか。

青年　いえ、救命ボートが足りなかったのです。小さな子どもと熟練の水夫たちは船から離れていました。私達は一生懸命に甲板の格子につかまっていましたが、ふと目を開けるとここにいたのです。

ジョバンニ　ああ、その船は……（ジョバンニ口をつぐんで落ち込む）

女の子　あら、あれはいったい何かしら（隣の窓へ移りながら何かを目で追っている）

青年　彼女だけでも助けることができたはずなんです。けれども沢山の子どもたちと、子どもたちに別れを告げる両親とを押しのけて救助列に割り込む勇気が、ぼくにはなかった。本当は、ほんとうなら。あの人たちを押しのけて彼女を助けられたなら、罪を被るのは僕だけでよかったはずなんです。ただ僕は、一人で罪を被る勇気がなかった。結局あの子の手を引いて、ここまで導いてしまいました。

女の子は祈っている。

讃美歌が流れ始める。

青年　なにがしあわせかわかりませんでした。ほんとうに。どんなつらいことでもそれが幸せに続く正しい道だと思っていました。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしだと。

青年　あゝ今日ここに果てんとや
燃ゆるねがひはありながら
外のわざにのみまぎらひて
十年はつひに過ぎにけり
懺悔の汗に身をば燃し
もだえの血をば吐きながら
たゞねがふらく蝕みし
この身捧げん壇あれと

青年、祈り始める。女の子、席に戻ってきて青年の手を解く。

新世界交響楽が流れ出す。

女の子　あら、新世界交響楽だわ。これはね、お母さまの好きな曲なの。

青年　ああ、ほんとうですね。ほんとうにここは素晴らしいところだ。

カムパネルラ　いかがですか。先ほど燈台看守に頂いたんです。こういうリンゴは初めてでしょう。

青年　ええ、立派ですね。ここではこんなリンゴができるんですか。

青年、一口食べる。女の子にリンゴをあげる。

女の子、リンゴを食べる。

女の子　私、お母さまのところに行くんだわ。もうずっと会えていなかった。会えるなんて夢みたい。何度も夜の夢の中で、お母さまが立派な戸棚と本のあるとこに居らっしゃった。私の方を見て手をだしてにこにこにこにこわらって。お母さま。りんごをひろってきてあげましょうかと私云ったのよ。でもお母さまはいつも返事してくださらなかった。もうお声も忘れてしまった。でもやっと思い出せるのね。

女の子　あら、あれはカラスかしら！

カムパネルラ　カラスじゃないよ。みんなカササギだ。

青年　ええ、ええ、あれはカササギですね。頭の後ろに毛がぴんと伸びています。

女の子　ほんとうだわ！　ああ、あっちも光っているわ！

カムパネルラ　こっちにはクジャクがいるよ

女の子　素敵！　沢山いるわ。あちらへ飛んでいくのね！

カムパネルラ　宇宙塵（うちゅうじん）を食べて、綺麗にしているのでしょう。

女の子　まあ、宙（そら）のきれいなこと。あら、あの人は鳥へ何を教えているんでしょう（カムパネルラに向けて言う）

カムパネルラ　わたり鳥へ信号してるんです。きっとどこからかのろしがあがるためでしょう。

カムパネルラ　あれはとうもろこしだねえ（ジョバンニへ向けて言う）

ジョバンニ　そうだろうね（不愛想に返す）

女の子　あら、インディアン。インディアンです。見て！

ジョバンニとカムパネルラが立ち上がる。

女の子　走ってるわ。追いかけているのかしら。

ジョバンニ　汽車を追ってるんじゃないよ。猟をしているんだ。

カムパネルラ　踊っているんじゃないかな。

青年　（黒曜石の地図を確認する）ええ、もうこの辺から下りです。一ぺん

にあの水面までおりて行くんです。あの水面があるもんですから彼らは決して汽車へは乗れないんです。そら、もうだんだん早くなったでしょう

電車の走行音が大きくなっていく。

赤い星が強く光り始める。

ジョバンニ　あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう？

カムパネルラ　サソリの火だ

女の子　あら、サソリの火のことならあたし知ってるわ。

ジョバンニ　サソリの火ってなんだい。

女の子　サソリがやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるって、お父さまから聴いたわ。

ジョバンニ　サソリって、虫だろう。

女の子　ええ、蝎は虫よ。だけどいい虫だわ。

ジョバンニ　サソリはいい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあってそれでさされると死ぬって先生が云った

よ。

女の子　そうよ。だけどいい虫だわ、お父さはこう云ったのよ。

青年　バルドラの野原に一ぴきの蝎がいて小さな虫なんか殺してたべて生きていました。するとある日イタチに見つかって食べられそうになりました。サソリは一生けん命にげてにげて。にげたけどとうとうイタチに押えられそうになりました。そのときいきなり前に井戸が現れたのです。サソリは真っ逆さまにその中に落ちてしまいました。もうどうしてもあがれないでさそりは溺れていきます。そのときさそりはこう云ってお祈りしました。

カムパネルラ　ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになってしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまってイタチにくれてやらなかったろう。そしたらイタチも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなのさいわいのために私のからだをおつかい下さい。

青年　そうしていつかサソリのからだはまっ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしました。

女の子　いまでも燃えてるってお父さまは仰ったわ。

カムパネルラ　そうだ。ジョバンニ、見てごらんよ。そこらの三角標はちょうどさそりの形にならんでいるよ。

女の子　ケンタウル、露をふらせ。ふらせ。ふらせ。

ジョバンニ　ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だね

カムパネルラ　ああ、ここはケンタウルの村だよ

ナレーション　まもなくサウザンクロス。サウザンクロス。

青年　さあ、おりる支度をしましょう。

ジョバンニ　ねぇ、僕たちと一緒に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける切符持ってるんだ。

女の子　だけど私達はもうここで降りなければいけないのよ。ここは天上へ行くとこなんだから。

ジョバンニ　天上へなんか行かなくたっていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりも、もっといいところへ行かないといけないって先生が言っていた

よ。

女の子　だって天上はお母さまも行ってらっしゃるし、それに神さまが仰っしゃるんだわ。

ジョバンニ　そんな神さまうはその神さまだよ。

女の子　あなたの神さまこそうその神さまよ。

ジョバンニ　そうじゃないよ！

青年　あなたの神さまはどんな神さまですか。

ジョバンニ　ぼく、ほんとうは神様なんてよく知りません。でも、知っていなくてもほんとうのたった一人の神さまです。

青年　ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。

ジョバンニ　ああ、そうじゃなくって。たったひとりのほんとうのほんとうの神さまなんです。

青年　だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方が今にそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。

青年、女の子降りる支度をする。

女の子　じゃあさよなら。またどこかで。

ジョバンニ　さよなら。

カムパネルラ　またどこかで。

赤い星が明滅する。フェードアウトしながら段々と車内が暗くなっていく。

ジョバンニ　カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、

カムパネルラ　うん、そうだねえ。（地図を取り出す）ああ、今僕たちはこんなに乗ってきたんだ。ね、ジョバンニ。もう一度切符を見せてくれよ。

ジョバンニ　いいよ。僕はこれがなんだかわからないけども、どこまでもどこまでも一緒に行こう。

カムパネルラ　すごいや、この切符はほんとうにどこまでもいけるんだ

ジョバンニ　ねぇ、カムパネルラ。覚えているかい。ぼくは学校から帰る途中たびたび君のうちに寄っていた。きみのうちにはアルコールランプで走る汽車があったんだ。いつかアルコールがなくなったとき石油をつかったら、かまがすっかり煤けたんだ。

カムパネルラ　ああ、覚えているよ。あれはアルコールで走っていたんだね。あの頃はよかったなあ。

ジョバンニ　うん、あの頃は良かった。カムパネルラとも、みんなとも沢山話せた

んだから。僕はもうあのサソリのようにほんとうにみんなのさいわいのためならば、僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわないよ

カムパネルラ　うん。僕だってそうだ。

ジョバンニ　けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう

カムパネルラ　僕、まだわからないや

ジョバンニ　ね、僕たちしっかりやろうねえ。

カムパネルラ　あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ

ジョバンニ　僕もうあんな大きな暗（やみ）の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。

カムパネルラ　ああきっと行くよ。あの野原はなんてきれいだろう。みんな集まってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あっあそこにいるのぼくのお母さん（おかあさん）だよ！

ジョバンニ　お母さん（おっかさん）。

カムパネルラ　お母さんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。ぼくはおっかさんが、ほんとうにさいわいになるなら、どんなことでもする。けれども、い

ったいどんなことが、お母さんのいちばんの幸なんだろう

ジョバンニ　ぼくわからない。お母さん。何かを忘れている気がするんだ。

カムパネルラ　けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。

ジョバンニ、ポケットから銀貨を取り出す。

ジョバンニ　ああ、僕、お母さんに牛乳を取りに行くんだった。

ジョバンニ、勢いよく立ち上がる

カムパネルラ　ねぇ、ジョバンニ。ぼく、いまやっとほんとうのさいわいがわかったよ。お母さんは、きっとぼくをゆるして下さる。ぼくはジョバンニが、ほんとうにさいわいになるなら、どんなことでもするよ。

カムパネルラ、緑のハガキを奪ってジョバンニを突き飛ばす。

星明かりが眩く明滅を繰り返す。ゆっくりと明滅が闇に染まっていく。

カムパネルラ、退場

ジョバンニ　カムパネルラ、カムパネルラ、僕たち、一緒に……

暗転

闇の中でたくさんの声が響く

「子どもが水へ落ちたぞ」「カムパネルラが川へ入った」「どうして、いつ」「ザネリが、ザネリが」「カムパネルラはどこに行った」「ああ、みんなきた」「まだみつからない」「ザネリは家へ連れられて行った」「水に落ちたぞ」「どうした」「どこにいった」

「カムパネルラ、カムパネルラ」……声は繰り返す

薄明かりが差し込む

車掌　　もう駄目です。落ちてから四十五分たちました

ジョバンニ、咳き込みながら立ち上がる

隣にカムパネルラが緑の手紙を持ったまま横たえている

ジョバンニ　　カムパネルラは川へ入った。ザネリが舟の上からうりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだそうで。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったようです。カムパネルラはすぐ飛びこんでザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。ザネリは助かった。ザネリはお父さんが迎えに来た。けれどもカムパネルラは水底の見えない闇の中に一人進んでいった。

ジョバンニ、タオルで体を拭く

ジョバンニ　なんだか夢を見ていたような心地でした。川の表面は夜空を写して、銀河のように穏やかに揺蕩いています。カムパネルラは一人、大きな闇の中に進んでいきました。

ジョバンニ、ボロボロになった緑のハガキをカムパネルラから取る。

ジョバンニ、水面を見つめる

ジョバンニ　空のずうっと向うに小さな青い火が見える。あそこはほんとうにしずかでつめたい。僕は、僕はもう、銀河鉄道には乗れない。